

はじめに

ウェブ上で「マガジン9条」（のちに「マガジン9」と改称）が立ち上がったのは、2005年3月1日のこと。小泉純一郎首相がライオンヘアをなびかせて自衛隊のイラク派遣に踏み切るなど、何かキナ臭さが漂い始めたころだった。その風潮に抗おうとする「憲法9条の精神を継承すること」を唯一の目標にした小さな集まりだった。

私たちが思った以上に多くの賛同者が現れ、たくさんの方たちが発起人になつてくださつた。発起人のお一人に森永卓郎さんもいらした。その縁で、「マガジン9条」の発足初期から「森永卓郎の戦争と平和講座」という連載コラムが始まつたのだ。

だから、「マガジン9」と森永さんのお付き合いはとても長かつた。感謝してもし切れない。

編集担当は塚田壽子が務めていた。

塚田の回想はこうだ。

森永さんのコラムは不定期連載だつたけれど、その週の掲載の予定が入れば、絶対に原稿を落としたことがありませんでした。いただいた原稿には、まったく誤字脱字がなかつたんです。すいこう推敲がきちんとされていたということだと思います。

独特のユーモアで自分を少しだけ卑下しながら、誰にも分かりやすい論理を展開するスタイルは終始一貫していました。

「私たち庶民の暮らしは、平和で自由で楽しいものでなければならぬ。当たり前のことなんですが、『経済学』というのは、そのためにあるんですよ」と、いつもおっしゃつていましたね。

森永さんは、ワーカホリックを自認されていました。本当に、いつ寝る時間があるのだろうかと思うほど、どんな場所へでも出かけ、講演をこなし、たくさんの原稿を書き、書籍も矢継ぎ早に上梓され、それでもいつもニコニコ。テレビ出演も依頼があれば、自分の思いを伝えるために引き受ける。

原稿でも講演会でも、日本社会の最悪な状況をデータで示しながら「ふざけんじやねえよ！」と真顔で啖呵たんかを切つて絶望的な未来予測を示すんです。「じゃあ、私たちは一体どうすればいいんですか？」と尋ねたことがあります。すると、笑顔でこんな返事が返つてきました。

「みなさん、アーティストになりましょう。搾取される仕組みの中の『奴隸』になるのを拒否しましよう！」明快でした。

その思いが、森永さんの遺された原稿を読むと、痛いほどに伝わってきます。「額に汗して働く人たちへの応援団」というお気持ちを持ち続けていたのでしょう。

森永さんはコラムの他にも、私たちの「マガ9学校」の講師も務めてくれたし、あまみやか雨宮処凜さんや堤未果さんなどとの対談も引き受けてくれました。そういう場面でも、まったく裏表がありません。誰とでも気軽に接し、それでいてその人への尊敬の念を忘れない、そんな方でしたから、「モリタクさんを嫌いだ」という人には会つたことがない。

あるラジオで遺言のように、こう言つていましたね。「ギスギスしないで、みんなで楽しく、仲良く……」

面白いエピソードもあります。ある対談が終わつたとき、「打ち上げということでビー

ルでも……」とお誘いしたことがあったのですが、当時、ライザップという体を引き締めるワークに取り組んでいらしたので「この期間、アルコールは一切ダメなんですよ」とちよつとさびしそうにおっしゃっていました。

どんな約束でもきちんと守る。森永さんは、そういう方だったのです。

こちらのお願いには、いつも快く応えてくださいましたが、たった一回、断られたことがありました。本当にご自分の最期を見極めたころだったのでしょうか。一応、コラム原稿の約束をしていたのですが、こんなメールが届きました。結局、このメールが最後の連絡になってしまったのですが。

「塚田様、こんにちは。大変申し訳ないのですが、どうしても残された時間で書かなければならぬ本があつて、時間を取ることがもうこれ以上できません。すみません、よろしくお願ひいたします」

がんとの闘病を公表してもなお、書き遺すべきものがある、との思い。次第にお瘦せになつていく姿を見ながら、それでもたくさんの本を出し続けた森永さんの姿。私にとつては大切な宝物になつてしましました……。

そんな森永さんが「マガジン9」の連載コラムで読者に訴えたかったこと。マガジン9編集部と集英社新書編集部が共同でその思いを厳選し、1冊の本にまとめた。その作業は、楽しくもあつたが、とても切ないものでもあつた。

連載原稿のテーマは多岐にわたる。

タイトル通り「戦争と平和講座」である。主に経済学的な面から見た日本政治の分析は厳しく鋭い。ことに、国家や大企業優先のアベノミクスへの批判は鋭いし、それをバックアップしたネオリベ（新自由主義）的な思想には、ズバリとその核心に矢を射込んでいる。また、富裕層や大企業が儲かれば、その「おこぼれ」が下にも滴り落ちてくるといういわゆる「トリクルダウン理論」の欺瞞性へも強く怒りを表している。

そして、何より大事なのは「戦争」を憎む気持ちが溢れています。まさに「戦争と平和」、トルストイの思想を現代日本に移し替えて、「戦争を起させないための政治のありよう、経済運営の仕方」を書き続けてくれたのが、「マガ9」連載コラムだった。

でも、時折ふつと、未来を見据えた「提言」が現れる。そこが「モリタク節」である。本書は、その「モリタク節」をじっくりと味わえる構成になつてていると思う。ぜひ、熟読

していただきたい。

賢人が残した言葉。それは色褪いろあせない。

「マガジン9」の連載コラムからは、すでに20冊以上の単行本が出ているが、「遺稿集」を編むのは、これで3冊目だ。

『またね。木内みどりの「発熱中!」』(木内みどり、岩波書店、2020年)、『鈴木邦男の愛国問答』(鈴木邦男、集英社新書、2024年)、そして本書だ。

本の編集は素敵な作業だけれど、もう「遺稿集」は作りたくない。

目 次

はじめに	マガジン9編集部	3
「ざまあみろ」では前進しない（2008年11月5日）		13
米国との関係を真剣に考えなければならない（2008年12月24日）		
日銀を「事業仕分け」すべきだ（2009年12月2日）		19
2010年の展望（2009年12月23日）		23
日米安保体制から考え方直そう（2010年3月3日）		27
腹案は徳之島だった（2010年4月28日）		31
これは鳩山クーデターであり、小泉構造改革の再来だ（2010年6月9日）		34
どこに投票すればよいのか分からぬ参議院選挙（2010年7月7日）		40

壁にすり寄つた菅内閣（2011年1月19日）	44
橋下旋風に潜むリスク（2012年1月11日）	49
もう一度、冷静に「新自由主義」について考え方（2012年4月4日）	
自民党憲法改正草案の本質（2012年5月23日）	59
日本の政治と経済はなぜダメになつてしまつたのか（2012年7月11日）	
危機に立つ日本（2012年11月21日）	68
金融緩和をどう考えるのか（2012年12月12日）	
コイズミの悪夢再び（2013年6月5日）	72
間近に控える第二の降伏（2013年8月28日）	78
徴兵制を導入した方がよいかかもしれない（2014年5月14日）	82
集団的自衛権問題で公明党は何ができたのか（2014年7月2日）	86
戦争をしないために、何が必要なのか（2014年12月10日）	95
安倍総理の暴走がなぜ止められないのか（2015年3月11日）	104
	62
	54

多様性の喪失こそ、戦争への道（2015年4月29日）	112
何を守ろうとしているのか（2015年8月5日）	121
なぜ野党は「消費税引き下げ」を言わないのか（2016年3月30日）	
参院選の争点は「国家」対「国民」（2016年6月22日）	
非暴力の前に不服従から始めよう（2016年8月24日）	
トランプ大統領誕生は日本独立のチャンスだ（2016年11月16日）	
財務省決裁文書改ざん事件の本質は何か（2018年3月21日）	136
財務省にだまされてはいけない（2018年5月16日）	131
自民党総裁選と消費税（2018年8月22日）	155
アクセルとブレーキを踏み間違えた（2019年10月30日）	167
新型コロナウイルス感染拡大は引き金にすぎない（2020年3月11日）	148
後進国に転落する日本（2021年4月14日）	142
すべての原因はグローバル資本主義（2021年9月22日）	180
	125
	196
	186

勘違いに基づくバラマキ批判（2021年10月27日）

203

もはや「逃散」以外に残された道はない（2023年1月11日）

211

言論の自由を失った日本にはびこる「ザイム真理教カルト」（2023年6月14日）

217

消費税撤廃で政治勢力結集を（2023年11月15日）

224

解説 「正真正銘の岐路」 古賀茂明

230

- ・本文で言及されている人物の肩書きや組織名・団体名等、及び各種の情報は、「マガジン9」掲載当時のものです。
- ・敬称は省略している場合があります。

「ざまあみろ」では前進しない

（2008年11月5日）

アメリカの信用バブルがはじけて、世界中が金融危機に巻き込まれている。経済的には確かに辛いが、これで、これまで世界中を苦しめてきた投機資金の命運が絶たれることになる。投機資金の逃避先がないからだ。

10月24日のニューヨーク・マーカンタイル市場では、原油価格は1バレル64ドルまで下落した。最高値だった7月11日の147ドルと比べると、実に56%も下落している。しかも、この間に12%円高が進んでいるから、円建てで見た原油価格は61%も下落していることになるのだ。同様のことは、シカゴ市場のトウモロコシでも起きている。6月27日に1ブッシュエル（編註：穀物の計量単位）7・65ドルの最高値をつけた後、10月24日には3・73ドルと51%も下がっているのだ。

これまで、世界の投機マネーは、アジアの金融危機、日本の不良債権処理、アメリカの不動産関連証券化商品と、舞台を変えながら、荒稼ぎを重ねてきた。

これまでカネにカネを稼がせてきた投機家が無一文になり、アメリカの投資銀行（証券会社）が次々に経営破たんや身売りをする。これまで数千万円から数億円の年収を誇つてきたインベストメントバンカーたちも、いまや単なる失業者になる人が増えている。

投機資金が企業を乗っ取ったことで、その企業に勤める人たちは、その後厳しい職業生活を余儀なくされている。投機マネーのおかげで、原油や穀物の値段が高騰し、発展途上国では飢餓^{ききやく}が起き、暴動が続出した。先進国でも多くの国民が物価高に苦しんでいる。

だから、彼らの暴挙に対する怒りを私は抑えられない。

リーマン・ブラザーズのファルドCEOが8年間で480億円もの報酬を得て、森の中のお城のような家に住んでいたことを知ったとき、正直言うと、私は「ざまあみろ」と思つてしまつた。

ただ、冷静に考えると、そうした悪魔の心は、捨てなければならないのだ。そんなことを思つても何も進展しないからだ。

今回、明らかになつたことは、新自由主義者が理想と考えてきた経済システムが、けつしてうまくいかない、むしろほとんどの人を不幸にするという事実だつた。だから、私たちがやらなければならぬことは、いまこそどういう経済システムを作つたら、世界の

人々が幸せになれるのかというグランドデザインを描くことなのだ。

そのための第一歩は、カネを増やすことへの飽くなき欲求を社会として戒めるあらゆる努力を積み重ねていくことだろう。お金を稼げば幸せになれるのではないし、お金を稼いでいる人が偉いのではないということを、子どものころから繰り返し教え、それを世界のコンセンサスにしていかなければならない。それを実現するだけで、世界は平和になつていくはずだ。